

# マイナスイオンのいろいろな効果は、世界中の多くの研究者・研究機関から発表されており、今後研究が進んでさらに詳しく解明されていくことでしょう。

■マイナスイオンは「やけど」の部位を速やかに乾燥させ、傷跡を少なくて、皮膚移植の必要を少なくてする。(Robert McGoan氏)

■「枯草熱(花粉症の一種)」と「気管支喘息」の患者数百名にマイナスイオンを吸入させ、その63%に軽快および全治を見た。(ベンシルバニア大学イオンセンター)

■眼の痛み、咽頭の鬱血はマイナスイオンで改善された。(1958年 Winsor氏とBeckett氏)

■マイナスイオン曝露で、視覚反応時間が短縮し、フリッカーチェックおよび指の叩打速度が向上した。これは、マイナスイオンによって酸素使用がいっそう効率的となって、これらのテストを向上させたものと解説。(1961年 Slot氏)

■マイナスイオンは、呼吸器の痙攣および喘息性気管支痙攣を改善する。(1966年 Palti氏)

■マイナスイオンは、血中のセロトニンを減少させる。(1968年 Krueger氏)

■マイナスイオンは、「いらつき症候群」において、セロトニン、尿中の5-ヒドロキシインドール酢酸を減少させる。(1975年 Sulman氏)

■マイナスイオン曝露で、運動課題が向上し反応時間が減少する。(1978年 Hawkins氏とBarker氏)

■マイナスイオンが不安を軽減する。(1980年 Forward氏とAlpern氏)

■マイナスイオンは、頭痛、恶心、めまいを改善する。(1981年 Hawkins氏)

■ラットによる実験、胃潰瘍の予防および進行に望ましい影響を及ぼした。(1991年 Deleanu氏)

■ラットによる実験、上昇した血圧を低下させ、自律神経(交感神経および副交感神経)に作用する。(1997年 Ju氏)

■マイナスイオンには、除塵効果、除菌効果、脱臭及びガス成分除去効果、調湿効果、帯電防止効果がある。(2002年 琉子氏)

■マイナスイオンが「細菌」の増殖を抑制し、「悪臭」の発生を防止できる。(1996年 谷村氏)

■マイナスイオン曝露で、メスのウシが、牛乳の生産量、牛乳中のタンパク質と脂肪含有率、および体重に顕著な増大を記録。(1960年 Tchijevsky氏)

■ネコにマイナスイオンを吸入させると、「血液」に対する酸素付加および酸塩基平衡の正常化によって、脳中枢の活動および他の生命機能の回復が促進された。(1967年 Sinaya氏)

■ウサギの実験、マイナスイオンは血管に「拡張的」にはたらく。これは「血圧」に対する作用と密接な関係。(1936年 松島氏)

■ウサギの実験、マイナスイオンは血液を「アルカリ性」に傾斜させる作用あり。(1935年 中島氏)

■ウサギの実験、マイナスイオンは「血中コレステロール」および「血中脂質」を低下させた。(1969年 Deleanu氏)

■ウサギの実験、マイナスイオン曝露で「通便」が正常化した。(1937年 大村氏)

■迷路を用いたラットの「学習行動」実験、「マイナスイオン環境のほうが行動が優れてくる」との結論。この結果から、タイプライター、ピアノ、自動車運転など、日常よく見られる技能習得といった、系統的学習に効果が顕著である。(1965年 Duffe氏と Koontz氏)

■プラスイオンは不安や焦燥感を高め、学習能力を阻害するのに対し、マイナスイオンは逆に不安感を軽減して学習能力を高める。(1967年 Nazzaro氏)

■モルモットに結核菌を感染させ、マイナス空気イオンを作らせると、結核の進行が遅くなり、生存期間が延びた。(1931年 Tchijevsky氏)

■マイナスイオンは、吸入する空気から、塵、花粉、その他の物質を取り除き、肺に侵入するのを防ぐ効果がある。(1959年 Krueger氏)

■マイナスイオンを多量に含む空気の中に、20歳から65歳までの正常な男女の被験者を置くと、通常の空気に比べ脳波の「 $\alpha$

波」がゆっくりと強く表れることを発見。その後、覚醒度と作業能力を調べると、全員が通常の空气中にいるときより高い成績をおさめた。(1969年 Sulman氏)

■アメリカでは、ビデオ表示端末操作者(コンピュータ従事者)に必要とされる職場の健康、安全、人間工学面での改善を勧めるべきとしている。その根拠は、

1. 静電環境における空気マイナスイオンの減少。

2. 電磁放射線。

3. 不満足な習慣性作業と不適切な作業条件に関連する眼球疲労と姿勢の歪み。(1992年 Horowitz氏)

■マイナスイオンが交感神経系に働いて鎮静効果を發揮するものと考えられる。また、そのマイナスイオンには、精神的ストレス負荷時の局所発汗量および脈拍の低減作用があり、リラックス効果があるものと考えられる。(1999年 渡部氏)

■空気イオンは皮膚を通して身体に吸収されるとし、皮膚の下にある神経終末は、イオンに対する「受容器」として働いており、それらが身体の器官に直接的な影響を及ぼす。(1960年 Tchijevsky氏)

■空気イオンの14~19%は呼吸器から、81~86%は体表から作用し、体表面からマイナスイオンを働くても鎮静・血圧降下などの作用がある。(足羽氏)

■マイナスイオンは、精神的覚醒を高め、心理運動課題成績を向上させる力があるとされ、より大きな活力と活気に満ちた気分をもたらし、いらつき、緊張、不眠、副鼻腔炎の再発を軽減したり、やけどをより早く、瘢痕をより少なく治癒させる。(1976年 Soyka氏とEdwards氏)



出典：  
『空気マイナスイオン応用事典』  
琉子友男・佐々木久夫編著